

市民メディアとしての『京都 TOMORROW』

小黒 純 (同志社大学大学院社会学研究科 教授)

E-mail ogurojun@gmail.com

樋口 摩彌 (日本学術振興会特別研究員)

E-mail maya.kyoto.j@gmail.com

要旨

雑誌『京都 TOMORROW』は1988年10月から2003年秋に京都で発行された。本研究は、発行時期における京都の社会状況を踏まえながら、特集記事を質的に分析した。その結果、このミニコミ誌は市民が担い手となり、景観問題など多様なテーマを扱い、議論し、発信していたことが分かった。市民メディアとして、市民団体が連携し、運動を続けるための基盤を築いた。

abstract

The magazine "KYOTO TOMORROW" was published in Kyoto from October 1988 to the fall of 2003. This study qualitatively analyzed the feature articles in light of the social situation in Kyoto at the time of publication. As a result, it was found that the citizens played a leading role in this magazine, discussing, and publishing various themes such as landscape issues. As a citizen media, it laid the foundation for civic groups to work together and continue their campaign.

はじめに

『京都 TOMORROW それぞれの京都論』(以後『京都 T』と略称)は1988年10月から2003年秋にかけて、京都市民の手によって発行された雑誌である。『京都 T』はどのような担い手が、どのような社会状況の下で、いかなる問題を取り上げたのか。どのような役割を果たしたのだろうか。

(1) 先行研究の検討

はじめに先行研究を検討する。研究対象とする雑誌『京都 T』は、京都市民によって発行されたミニコミ誌である¹⁾。ミニコミ誌は、書店などで販売される一般的な雑誌とは、発行の目的や編集方法な

ど、異なる特質をもっている。ミニコミ誌の代表的な研究は丸山(1985)がある²⁾。ここで丸山はミニコミ誌について「その時の時代相と深く結びついている。マスコミが社会の反映であるなら、ミニコミはもっと深い部分での社会の反映である。それは人々の生き方の表明であり、つながりのためのメディアである」³⁾という。また一市民である発行者については、「世の中という土壌のもっとも固い部分を耕す人たちであり、肥沃な土壌を荒廃させようとする力に抗う人々である」⁴⁾と、比喩的な表現を用いて、ミニコミ誌の社会的な役割を論じている。

また『京都 T』は、京都という地域に特化しているという特徴より、タウン誌としての性質も持ち合わせている。タウン誌の研究としては、田村(1979)⁵⁾、高橋(2003)⁶⁾などがある。田村(1979)は、タウン

誌の社会的定義として「中央集権化された出版流通制度に代表される雑誌ジャーナリズムの外にはみ出し、地域主義的な思想に立ち、それぞれの町や市で多少なりとも自立性を求めた定期刊行物」⁷⁾と述べている。また近年のタウン誌に関する研究としては、岡村・安藤(2018)⁸⁾が挙げられる。鳥取のタウン誌『スペース』を分析した上で、書き手である徳永進の思想や活動を論じている。

上述の先行研究をまとめると、ミニコミ誌やタウン誌は、地域に根付いた市民が発信するメディアであると位置づけられている。またその特徴は、発行者や書き手が何らかの方向性や目的を明確に掲げて、編集したものであると述べられている。

では『京都 T』は、丸山が述べるように、「もっと深い部分での社会」をどのように反映したのか。また何とどのようにつながったのか。そして、市民が発信するメディア(市民メディア)としてどのような地域の問題を扱い、何に抗おうとしたのか。先行研究を受けて、本稿はこうした問いに応えようとする。

(2) 研究対象

本研究は、雑誌『京都 T』発行時の京都という一都市を取り巻く社会的、経済的、政治的な状況を踏まえて、分析および考察を進める。『京都 T』は、綿密な調査に基づく情報を毎号掲載しており、詳細かつ本質的なところに踏み込んでいる。つまり『京都 T』からは、雑誌発行当時、京都の市民がどのような問題に直面していたか、問題意識を把握するために非常に有用な媒体であるといえる。

しかし現物を全号所蔵している機関は1館だけで、簡便にアクセスできない。また貴重な雑誌である場合、その保存も危ぶまれる。こうしたなか、近年、雑誌などの紙媒体の史資料のデジタル化とデジタル・アーカイブ化が進んでいる⁹⁾。2018年、『京都 T』も雑誌全号全ページがインターネット上から閲覧可能となった¹⁰⁾。本研究は、雑誌のデジタルアーカイブ化が雑誌の保護と公開に寄与することを考慮し、このデジタルアーカイブを利用して研究を進める。

(3) 本研究の目的

本研究は『京都 T』を分析および考察して、

1980年代後半から2000年前半までの京都のミニコミ誌、あるいは市民メディアとして、誰が編集の主体となり、どのようなテーマや社会問題を扱ったのかを明らかにする。雑誌の分析は、『京都 T』の編集・発行体制の変化より3つの期に分けし、中心テーマがどのように移り変わったのかを整理して、特徴を明らかにする。

なお結論を先んじて述べることになるが、『京都 T』は市民運動に関する記事を多く掲載していた。それゆえ、市民メディアとしての『京都 T』が、京都の市民運動に与えた影響を考察する。

その一方、分析・考察は雑誌の特集記事に特化し、読者側、つまり受け手側の研究には原則立ち入らないことにする。

(4) 研究の方法

デジタル・アーカイブ化された全51号を対象とし、上記(3)の目的を達成するため、まず全号のいわゆる書誌情報を確認する。つまり、各号の発行時期、発行元、編集者、ページ数、形態、価格などを、3期に分類した上で整理する。

こうした基本情報を土台に、あらゆる雑誌の中核部分を占め、雑誌の性格を色濃く反映する特集記事に着目し、質的な内容分析を行う。特集のテーマは何か。誰がどのような切り口で、何について問題提起しているのか。これらを各期ごとに質的に分析し、特徴をとらえていく。その特徴を発行時に照らし合わせ、『京都 T』が市民運動に与えた影響や、社会における『京都 T』の位置付けを考察する。(付録表『京都 TOMORROW』特集記事一覧表)

(5) 本稿の構成

本稿では第1章で雑誌『京都 T』の概要と、創刊号から読み取れる発行趣意を述べる。そこで触れるが、『京都 T』は全3期に分けられる。第1期が1988年10月号から1992年7月号、第2期が1992年8月号から1996年5月号、第3期が1997年冬号から2003年秋号である。これらを第2章から第4章まで順次、内容分析の結果と考察を記述する。そして、第5章で結論を述べる。

1 『京都 TOMORROW』の立脚点

1.1 『京都 TOMORROW』の書誌情報

『京都 T』は1988年10月に創刊された。発行の頻度は、当初から隔月に発行されていたが、1997年冬号から季刊（年4回）となった。発行号数は全51号で、2003年に実質上の廃刊となった。最終号は2003年冬号である。

ページ数は表紙、背表紙を含む72ページが大半で、大きさはA5サイズの縦型である。価格は創刊当初は1冊400円で、廃刊時は510円である。この間に消費税導入などの税制の変更もあった。

発行は編集委員の編成や発行元の改組によって、3期に分かれている。第1期（1988年10月号から1992年7月号）は全22号、第2期（1992年8月号から1996年5月号）は全19号、3期（1997年冬号から2003年秋号）は全10号である。

号数の表記は、1期は○号、2期は2-○号、3期は3-○号と記されており、本稿の表記もそれに準じる。

なお創刊号の奥付によると、発行人は牧野文夫、編集スタッフは高橋章三、折田泰宏、谷本さやか、中山和弘の4人である。創刊に尽力し、第1期を牽引した牧野文夫は元 NHK 記者である¹¹⁾。折田泰宏は弁護士、中山和弘は写真家である¹²⁾。他第2期以降に高橋幸子が編集委員として参加する。高橋幸子は『まま父物語』（思想の科学社、1996）を上梓した著述家である。

1.2 発行の狙い — 「創刊によせて」より —

正式名称は『京都 TOMORROW』で、副題に『それぞれの京都論』とある。では「それぞれの京都論」とはなにか。創刊号1ページ目の牧野文夫率いる「京都 TOMORROW 編集部一同」によって記された「創刊によせて」の冒頭部分で、創刊へと至った経緯、および発行意義がまとめられている。

ここに冒頭部分を引用する。

五年数か月にわたって京都を揺るがせた京都税紛争は、時間と労力を浪費しただけの愚かな争いゆえに、その恥を天下にさらしてしまった。（中略）住環境の悪化は目を覆うばかりである。とくにビルの高さ規制緩和にともない古都の風情が歴史の闇に没しかねない。（中略）その責任の大半は能力を欠いた行政当局であらう。¹³⁾

京都税をめぐる騒動が落ち着いた後も、京都では目を覆うばかりの開発が絶えなかった。例えば平安遷都1200年記念事業をめぐる建設物の高さ規制の緩和である。その他の問題も多数あり、本論中に適宜言及する。こうした問題の原因として、京都の行政当局の姿勢を厳しく批判している。

ただし「批判ばかりでは問題の解決にほど遠い」ので、「必要なことは市民が個として自立し、生き方を含めた新たな価値観の創出ではないだろうか」と、京都市民に新たな提案を行い、「京都の現状を鋭く抉り明日を共に模索すること」という決意を述べている¹⁴⁾。

ただし、意見が偏らないように慎重な姿勢もみられた。その姿勢は「京都百四十数万市民、それぞれの京都観があって当然であり、そのことを抜きにして市民の自立を叫ぶのは、砂上の楼閣でしかない¹⁵⁾」という見解に表れている。事実、賛成派と反対派の両意見が掲載されることも多々あった。

1.3 市民の声を集めるための工夫

では、どのように市民から声を集めたのか。創刊号から8号までの表紙は、切り取れば投函できるハガキになっており、読者は意見の投稿しやすい仕組みになっていた。事実その簡便さが原因なのか、創刊号に対しては10数通の投稿があったという¹⁶⁾。

しかし、その斬新な創刊号に対して、読者から辛口な意見も寄せられた。例えば第2号の「読者の声」欄には「表紙の切り取りはあまりにも過激ではないか、京都の大衆を動かすにはキツスギル」とある。それに対し編集部は「アピールしたい我々の気持ちがそれを越えてしまった。ご理解いただ

きたい」と返答している。また投書ハガキは東京都からも寄せられた¹⁷⁾。つまり京都以外の地域でも読まれていたことがみてとれる。

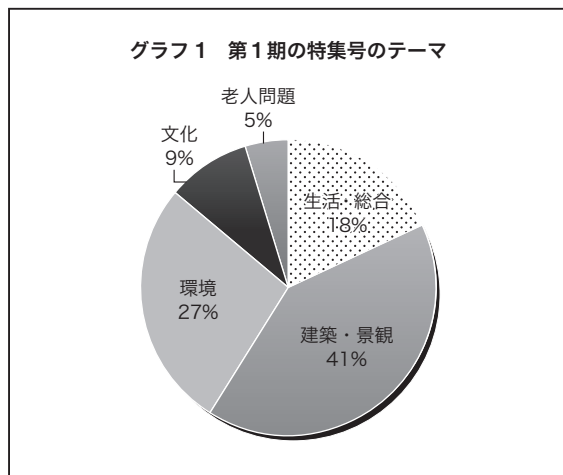
2 市民運動の土壌を形成

—第1期の記事分析より—

2.1 雑誌『京都 TOMORROW』の発行意義

—京都の都市計画の見直し—

第1期は1988年10月から1992年7月の5年弱で、合計22号が発行された。特集記事を「生活・総合」、「建築・景観」、「環境」、「文化」、「政治・金融」、「老人問題」の5項目に分けて分析すると、第1期の特集記事は、「生活・総合」、「建築・景観」、「環境」が頻出している。とりわけ「建築・景観」が最も多く、全9号で特集がくまれている(グラフ1)。



1980年代から1990年代前半の京都は、乱開発といえる経済発展を主眼とした都市開発が一気に進められた時期であり、それゆえ自然環境やこれまでの京都市民の暮らしの継続とのバランスが問われた時期であった。また、建設業者や京都市が関与する都市開発に一般市民が異を唱えるなど、京都市行政と京都市民の間でのさまざまな軋轢が生じた時期でもあった。

第1期の特集記事でもっとも多いのは、景観問題である。全22号のうち、11号を占めている。とりわけ第13号には「第三次京都景観論争」、第

14号にも「再び、京都景観論争」、第15号にも「京都景観論争の新段階」と、景観論争が取り上げられていることがわかる。その他、第2号の特集記事は「京の町並みを考える」、第21号の特集記事は「揺れ動く京都景観問題」、また第19号も「消えていいのか京都の近代建築」と、景観問題を頻繁に大きく扱っている。このように特集記事のテーマを分類すると、『京都 T』第1期は、景観問題を重要視していることが伺える。

そもそも『京都 T』の発行は、京都の景観、町並みの問題を取り上げることに主眼を置いていた。

いよいよ京都の景観問題を正面から取り上げることになりましたが、今まさにその機が熟したと言って良いと思います。この雑誌の「それぞれの京都論」の副題は、この議論のために用意されたものと言っても過言ではありません。(中略)市民のコンセンサスの行方を早急につきとめて、京都の都市計画の見直しをすみやかに実現しなければ、保存の立場からはもちろん、秩序ある開発を求める立場からも、取り返しのつかない事態になってしまうでしょう。¹⁸⁾

すなわち、京都という都市のあり方について多方面から議論し、京都の都市計画を早急に見直すことが『京都 T』を創刊し、発行し続ける本意といえる。

特集記事の中では、高さ制限が緩和された京都ホテルや京都駅改築工事は是非がテーマになっている。例えば、印刷会社役員である中西秀彦は「景観破壊か経済破壊か」と題し、京都には残すべき景観はもうないので、観光地という京都の特性を生かしてホテルを建設すべきだという意見を述べた¹⁹⁾。また京都大学名誉教授の西山外三は「(前略)一破滅へと加速する古都の肖像—」と題し、市民に公開せずに開発を進めた京都市の姿勢を批判した²⁰⁾。また清水寺前貫主の松本大圓は「(前略)一建設を一時ストップして徹底討論を—」と題し、行政当局が京都独特の景観を壊さないようにすべきだと指摘した²¹⁾。

このように『京都 T』は、開発に反対する意見

だけではなく、賛成意見も掲載している。他にも反対運動の中心人物だけではなく、開発を推進する企業の意見も掲載していた。また専門家の意見と主婦などの一市民の意見を、並立して取り上げている。すなわち『京都 T』の副題にも「それぞれの京都」とあるが、一つの方向に偏らず、職業や地位、思想、人生観など、「それぞれの立場」から問題を論じる姿勢が、本雑誌の特徴であると言える。

2.2 乱開発と市民運動の盛り上がり

この時期、京都市内では、乱開発とそれに伴う自然環境の破壊や近隣住民の生活環境の悪化が問題視されていた。それらのことを背景に、第5号の「鴨川を考える」、第6号の「鴨川を考える(2)」と2号連続で特集が組まれた。

この特集記事に関連する鴨川上流のダム建設計画は、その後も度々記事が掲載された²²⁾。1989年、鴨川の上流にダム建設が計画された。これに対し、鴨川の自然体系が崩壊される可能性が指摘され、地元では大学、寺院、一般市民などから次々と反対の声をあげた。その反対運動を先導したのが、鴨川の水源地といわれる地域にある志明院の住職、田中真澄だった。田中は度々『京都 T』に投稿しており、第12号「鴨川ダム計画撤回!」などで、建設反対を強く訴えている。こうした市民の反対運動の盛り上がりもあって、鴨川の整備およびダム建設は見送られた²³⁾。

この他、京都市左京区的一条山の乱開発も問題視され、第9号に「一条山の悲劇」として特集が組まれた。しかし、住民の許可を得ていなかったため開発は中断し、なだらかで多くの木が茂っていた山は、頂上の一部だけが残される「モヒカン山」となった。こうして、「市民グループ一条山と岩倉の環境を守る会」が結成され、さまざまな反対運動が展開された。やがてこの問題は朝日新聞などのマスメディアにも取り上げられ、1990年1月30日のテレビの報道番組『ニュースステーション』で、“モヒカン刈り”の一条山が強力なライトで浮かび上がった映像とともに、全国で紹介された²⁴⁾。

その後も第10号には編集部が「一条山開発許

可・行政不服審査請求第一回公開口頭審理から」をまとめている。それによると、京都市が地元住民の審査請求に対して弁明書を提出したが、「その内容は全くしらじらしく」「あまりにもばかばかしい」と編集部は酷評した²⁵⁾。また第14号には「一条山現場検証行われる」として、1990年10月2日に一条山現地でわれた公開口頭審理に寄せられた鶴見俊輔、岡部伊都子からのメッセージが掲載された²⁶⁾。

2.3 市民運動のハブに

1989年は、鴨川ダム建設計画以外にも、市民の了承を得ない多数の開発計画が進められた。その問題に向き合うために結成されたのが「京都・水と緑を守る連絡会」で、15団体が加盟した。京都で活動する数多くの市民団体が一丸となり、開発事業などに対峙した。

連絡組織に名を連ねたのは次の団体である。芦生の自然を守り生かす会、鴨川ダム反対連絡会、京都大学芦生ゼミ、グループ市民の眼、大文字山ゴルフ場建設に反対する会、西山の自然と文化をまもる会、日本野鳥の会・京都支部、洛北土の会、小倉山町地区計画推進委員会、京都府勤労者山岳連盟、京都北山大規模残土投棄社画に反対する連絡会、残土投棄に反対し大見総合公園計画を考える会、大文字山ゴルフ場問題を考える会、京都環境保護国際交流会、八一平を守る会。名称から分かるように、さまざまな環境問題に取り組む団体が結集した。そして『京都 T』を、問題提起の場とした。

例えば、「グループ市民の眼」は、第6号「特集 鴨川を考える」で、「情報公開を阻むもの ―鴨川改修資料請求から―」として寄稿している。京都府河川課の鴨川ダム建設計画および改修計画に関する住民への姿勢が「決定してから公表するもの。途中で住民の意見は聞かない」(『京都新聞』1988年12月29日) ことなどを問題視した。1989年5月29日に鴨川のダム建設を含む鴨川改修計画に関する情報公開請求を京都市に行い、行政の責任を追及した。また「グループ市民の眼」事務長の保本公一は、第15号から第1期の最終号であ

る第22号まで編集委員として活躍した。

こうした市民活動の中心、また情報交換の場所を『京都 T』が担った。とりわけ第10号からは、市民活動や集会に関するスケジュール、『京都 T』に登場した市民団体や協会の連絡先などを掲載した²⁷⁾。これらの情報は、市民がより一層連携し、乱開発や行政主導の都市開発について意見を交わせるために提供された。

2.4 小括

ここまで述べたことをもとに『京都 T』の第1期の特集記事をまとめると、『京都 T』は行き過ぎた開発に対して市民自身が気づき、多様な意見を交わし、必要に応じて立ち上がり、反対運動に向かうことを市民メディアとして後押しした。そして『京都 T』は京都にある複数の市民団体をつなげることで、市民運動のハブとなり、京都市民が力を合わせて立ち向かう地盤を形成したと位置づけることができる。

3 市民主体の雑誌発行 — 第2期の分析より —

3.1 元女性読者が編集実務に参加

第2期は1992年8月から1996年5月の5年弱で、合計19号が発行された。第2-1号の奥付を見ると、編集者は第1期からの折田泰宏と高橋幸子、牧野文夫の3人に、新たに塚崎美和子、松田普美子が加わった。しかし編集後記には牧野による文章はなく、その後も確認することはできない。つまり創刊を担った牧野の名前だけは掲載されるものの、雑誌制作の第一線から退いたことがうかがえる。それと呼応するように、第2期の特集記事からは、第1期で示したような、開発業者と市民運動の攻防のような一刻を争うような記事が消えた。

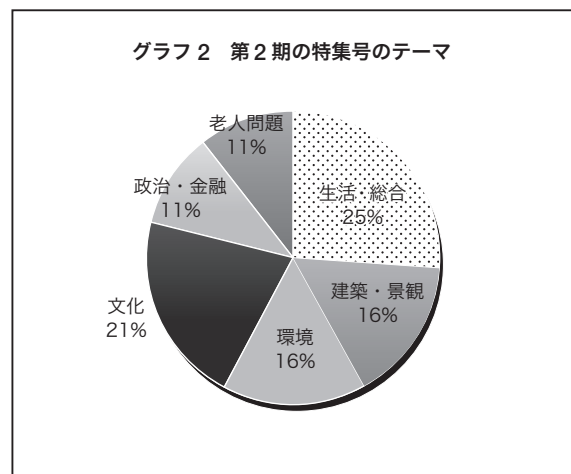
牧野氏に代わって雑誌発行に関わったのは、かつて一読者であった女性たちだった。第2期の第1号目である第2-1号の編集後記には、編集委員である塚崎美和子が「月に一回、編集会議に参加し

てみない?と伏見に住む女友達に誘われたのが昨年10月」と語り、編集会議の様子を述べている²⁸⁾。他の女性編集委員も、「これまでホンの少し、部分的に参加してきた」と語るなど、ジャーナリストではない市民の女性が、雑誌発行に携わっていることが分かる。

塚崎は「今回は、女性たちの視点を取り入れたいと努力した²⁹⁾という。実際、特集記事も、市政に立ち向かうような形ではなく、編集委員による綿密な取材記事が増えており、この傾向は第2期全体に通じている。

3.2 日常生活目線の特集記事

実際、どのような特集記事が記されているか。グラフ2で示した特集記事を概観すると、「老人問題」が大きく増加している。具体的には「老人ケアのゆくえ—死ぬまで京都でくらしたい—³⁰⁾」「死ぬまで京都でくらしたい—老人ケアの現在—³¹⁾と、介護問題が取り上げられた。内容はホームヘルパーとして働く女性たちのインタビューや在宅ケアの現場で働く人たちの座談会、ホームヘルパーに関するQ & A や、京都に複数ある老人ホームへの取材様子など、多くの主婦が向き合う介護の実態を、取材したものであり、女性からのニーズに応えた記事といえる。



このほか編集委員が京都市内を綿密に調査して掲載した、「文化」も増えている。例えば、第2-2号の特集記事「京の樹木に会う³²⁾では、「京の樹木マップ・街路樹めぐり」として、写真家の倉

本義久と編集委員の一居時江が、京都市内に植えられた木々を取材し、撮影した写真を地図に落とし込んで、京都の町全体を植物園のように描きだした。

また、第2-9号の特集「京のみち・路・道・通」³³⁾では、専門家による座談会が企画されるとともに、実際に道を歩いて記された記事に、「京の七口」として編集委員である塚崎が解説を書いている。

第2-15号の特集「京都の本屋さん」³⁴⁾では「京都には歴史ある本屋さんが、わんさとある」というように、本屋を京都独自の文化と捉えた。書店店長らによる座談会や、大学教授や作家などから京都の本屋に関するアンケート、「京都における本屋さんの歴史」から、今は閉店した店も含む14もの書店への取材など、さまざまな角度から京都における書店の文化を描き出した。

一方、戦争に関する特集も多い。第2-7号の特集「戦時期の京都一証言・体験を追う一」は、学徒動員の経験がある市民に取材をし、当時の証言・体験談を集めた。また「占領期の京都」では、編集委員の調査によって占領期の年表が作られた。対象時期は1945年8月15日の玉音放送から1994年9月の自衛隊PKO派遣までで、19ページにわたってまとめられた。これらの典拠とされたのは『京都新聞』、『京都府百年の歴史』、『京都府議会史』、『京都府百年の資料』、『市政要覧』、『京都市会史』などで、綿密な調査がなされたことが想起できる。

その反面、第1期で重要視されてきた景観問題や乱開発に対する市民運動への視点がなくなったわけではない。第2-11号の特集は「なんどす？ 建都1200年」である。大学教授などによる座談会が企画される一方、編集部は「うおっちんぐ 京都一二〇〇年事業」と題して、一二〇〇年祝祭イベントとなる舞台およびその工事現場を取材している。しかし複数の現場で工期は遅れていること、予算を超えていることなどを指摘しており、「一二〇〇年事業の一貫したテーマは『伝統と創生』。実際の一二〇〇年事業はこのバランスがどうもおかしい」³⁵⁾と指摘した。

特集記事ではないが、一条山の開発業者の言い分を認めた「一条山開発問題で逆転裁決」や

「京都北山・大見の立木トラスト運動」、「小倉山を見つめる会」のJR西日本を相手にした訴訟問題は、『京都T』の中の1コーナーの「TOMORROWジャーナル」³⁶⁾などで伝えられた。

ここから分かるように、第2期全19号の特集記事のテーマは、「建築・景観」、「環境」について市民メディアとして行政の責任を厳しく追及するだけでなく、介護問題や京都の文化など、日常生活に即したテーマが拡大した。

3.3 ミニコミ誌としての自負

1994年12月、NTTが地域文化・地域コミュニケーションの振興・発展の一助として実施した「NTT全国タウン誌フェスティバル」で、『京都T』は1994年度（1993年10月1日～1994年9月30日）の「奨励賞」を授賞した³⁷⁾。これは586誌の応募の中から、大賞1誌、部門賞3誌、奨励賞10誌が選ばれたものである。こうして全国的にも高い評価を受け、11月28日に東京帝国ホテルで授賞式が行われた。

しかし、『京都T』は、コミュニティの情報を発信する一般的なタウン誌とは異なっている。丸山は「タウン誌に問題意識がない、商業性を抜きにしたら何が残るかという批判もある」「タウン誌とミニコミは似て非なるものである」³⁸⁾と述べているように、『京都T』は問題意識をもって発行された雑誌であり、商業性はほとんど感じられない。加えて編集委員と読者が一同に会する合評会にて、読者から「（『京都T』は）タウン誌というより、コミュニケーションの場としてのオピニオン誌」と述べられるなど、商業主義ではなく、主義主張がある雑誌であることが強調されている³⁹⁾。

3.4 読者主体の合評会

第2期の『京都T』は、毎号ごとに合評会が企画され、読者や記事の協力者に対して、参加を募集している。開催日はおもに発行月の月末で、編集事務所がある京都市上京区の吉原邸で開催された⁴⁰⁾。

合評会では毎回、報告者が、テーマの内容に

ついて発表する。例えば、1994年12月13日に開催された「琵琶湖大湖水」に関する合評会は、一読者である長岡京市の男性が報告を担当した。報告内容は、琵琶湖の水質汚染を切り口に農薬の問題など、議題は多岐に及んだ⁴¹⁾。

1995年4月26日には、特集記事「阪神大震災と京都」の第2-16号の合評会がおこなわれた⁴²⁾。当日の写真によると、軽食と飲み物が準備された座敷に円座をつくり、議論を交わしている。第2-15号の合評会の参加者は18人だったので、同人数程度の参加者がいたとみられる。

合評会では、読者が編集委員に対し、阪神大震災に関する特集記事について、「編集の方向として、一・一七の京都の被害にしぼるのか、神戸のような地震の時、京都はどうなるのか、どうするかにしぼられていないとの批判」し、「今回の地震をどう政治にからませていくのか、地震で殺された上、被災後、経済・行政の問題として弱者が再度殺されていくという現況を認識し、社会問題として行こうという提起」⁴³⁾をした。一方で、「地震に強い町づくりばかりが主張されていて、今後、コンクリートづくめの都市ができる可能性がある。しかし自然を生かした町づくりをあらゆる角度から模索したい。だから本誌に期待する」と、『京都 T』への期待も語られた。

今後の特集記事の提案としては、「京の悪口」「京と職人」「宗教と京都」が挙げられた。次号2-17号の特集記事は「京都・宗教案内」であり、読者の提案が採用されていることが分かる⁴⁴⁾。

3.5 小括

以上から第2期の特徴をまとめる。『京都 T』の運営体制をみると、一読者から編集委員への転身や、合評会での読者による編集方針の提案など、市民である読者と市民である編集委員の距離が近くなった。換言すれば、市民同士が協力し合って主体的に雑誌を発行し、市民メディアとして『京都 T』は何を発信するべきか、さらにいえば都市としての京都のあり方を議論していたといえる。

また記事内容を見ると、第1期の特徴である建築・景観などの専門性が失われ、6つのテーマがまん

べんなく取り上げられるようになった。これは主婦など、特に専門性をもたない市民が、編集作業を担ったことによる影響といえる。

4 市民から専門家へ

—第3期の分析を手掛かりに—

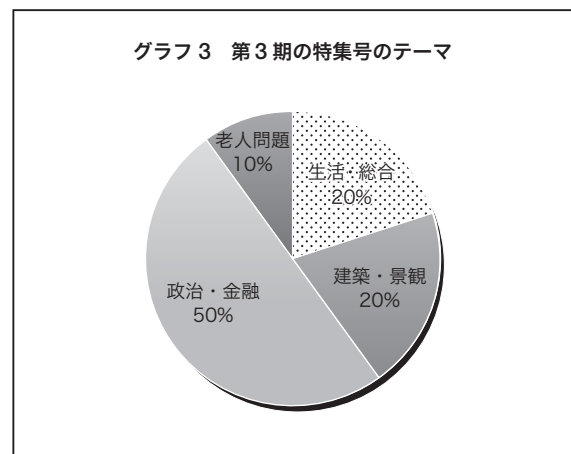
4.1 発刊頻度の減少

第3期は1997年冬号から2003年秋号の7年弱で、合計10号が発行された。第2期の最終号である2-19号が1996年5月に発行され、1年以上空いたのち、1997年冬に第3-1号が発行された。『京都 T』創刊当初、発行頻度は2ヶ月に1回であった。第2期の第2-16号から2~4ヶ月に1回のペースになり、第3期には、4ヶ月毎の季刊誌となった。ただし第3-5号から第3-8号は1年に1号の発行で、発行は遅れた。編集委員をみると、第3-1号から第3-5号までは、折田泰宏を筆頭に全8人が並ぶ。しかし第3-6号では折田泰宏、安見恵子、阿月美枝の3人になり、3-7号と3-8号は阿月が抜け2人になる。そして第3-9号と第3-10号は北野良子、平山舞が新たに加わり4人になる。このように編集委員が入れ替わり、メンバーが不安定になった。

4.2 金融政治中心の記事へ

第3期の特集記事を概観する(グラフ3)。

第3期の特徴は、「政治・金融」の特集が急上



昇し、半数を占めたことである。具体的には第3-3号が「どうなっている？京都の政界」⁴⁵⁾、第3-5号が「京都の不況」⁴⁶⁾、第3-6号が「金融再編成・京都版—市民からの提言」⁴⁷⁾、第3-7号が「ベンチャーの攻防 in 京都」⁴⁸⁾、第3-9号が「京都市長選—動き出した市民派」⁴⁹⁾と、全体の半数を占めた。

第3-6号の記事をみると、京都経済新聞社長の築地達郎、弁護士の唯野弁太郎、同じく弁護士の牧野聡が寄稿していた。また元銀行員、元信用金庫職員が、匿名で座談会に出席していた。編集委員筆頭の折田は弁護士であり、弁護士が増えたのは折田の人脈であると考えられる。このように弁護士や専門性を持った銀行員が執筆するようになり、主婦ら一般市民の投稿は徐々に減った。

4.3 市民活動への注目の低下

第3期が発行されている1990年代後半の京都では、「ポン・デ・ザール橋反対運動」と呼ばれる市民運動が繰り広げられた。これは、京都の鴨川にフランス風の歩道橋（ポン・デ・ザール橋）を架設しようという計画に反対した運動で、やがて全国にも広がるなど大規模な反対運動に発展した⁵⁰⁾。この一連の騒動について、第3-4号の特集記事「幻と消えたポン・デ・ザール橋」がある。ここでは京都大学助教授の伊徒勉や弁護士の唯野弁太郎が寄稿している。また「町の声、わたしはこう思う」として市民4人からのインタビューが掲載された。そして編集部によって「これまでの経緯」として年表がまとめられた。

ただし、架橋計画が発表された後に発行された第3-1号には、この計画に関する記事はなく、第3-2号も編集部による巻頭エッセイと、『京都新聞』1998年2月13日付と『朝日新聞』1998年2月23日付の記事の引用に留まっている⁵¹⁾。また第3-4号の特集記事は「京・ゴミ・今日」との2本立てで、ポン・デ・ザール橋計画に割かれた紙幅も1～27頁と少ない。

『京都T』のこの市民運動への注目は少ないが、市民は運動開始当初から連携をとり、結果、日本全国を巻き込む運動へと発展させた。これは市民運動が一定程度成熟したことの証左といえよう。

4.4 小括

以上から第3期の特集記事の特徴をまとめる。まず記事内容について述べると、金融・政治が著しく増加した。これは当時、バブルが崩壊し、社会全体が不景気になったことによる影響だといえる。一方、1997～1998年はポン・デ・ザール橋の反対運動があったが、市民活動を取り上げたのはわずか1度のみであった。これを第1～2期と比較すると、著しく減っている。これは、『京都T』の第1、2期は、市民運動の盛り上がりとともに歩み、基盤形成に寄与した。その結果、第3期は新たな編集体制の下で、市民メディアとして鴨川歩道橋問題などのほか、金融問題など新たなテーマにも取り組んだのである。

5 おわりに

5.1 『京都TOMORROW』の変遷と役割

本稿では、発行時期における京都の様相を踏まえつつ、特集記事を質的に分析することによって『京都T』の変遷を明らかにした。

全体をまとめると、京都市行政や開発業者による行き過ぎた開発に対し、京都市民は市民団体を結成し、1980年後半から反対運動を開始した。弁護士や元NHK記者らが創刊した『京都T』は、複数あった市民団体の連携や、市民団体の情報発信の場として機能した。京都市民は市民運動の基盤を築くために、『京都T』の場を活用したと言える。

1990年代前半から、京都市民は自ら『京都T』の発行に参画するようになった。そこでは市民が主体的に、都市としての京都のあり方を議論し、発信した。こうして特に自ら情報発信をする基盤を築いた。まさに市民メディアとして一定の役割を果たしたのである。

そして1990年代後半の京都のみならず、日本さらにはフランスをも巻き込んだ景観騒動の際は、これまでの蓄積を生かして手際よく連携し、京都市

議会の決定を覆した。これはこれまでの『京都 T』の周辺で構築された市民の連携が、市民が求める京都という都市の姿として結実したものといえる。

すなわち創刊当初に掲げた『京都 T』の目的を達成したといえよう。こうして『京都 T』は市民メディアとしての役割を終え、その後は大きな乱開発なども起こらないまま、2003年に終刊となった。

5.2 『京都 TOMORROW』の創造性

『京都 T』は市民活動の後押しとはなかったが、行政の施策や大規模開発への反対運動のみを推進したわけではない。乱開発には反対したが、例えば、自然誌博物館設立や京都駅前に森を作る計画など、もし実現していたら世界的にも評価された可能性がある、先駆的な都市計画を積極的に提案していた⁵²⁾。これは創刊号で発行目的として掲げたように、市民メディアとして「明日の京都」を創造的に模索していた証と言える。

5.3 『京都 TOMORROW』の位置付け

『京都 T』終刊以後の京都の様相はどのようなものか。『京都 T』終刊以前の2003年、京都のコミュニティの活性化をめざして、NPO 放送局「FM79.7MHz 京都三条ラジオカフェ」が誕生した。このコミュニティ放送局は「市民が主役の放送局」であり、誰でも放送料を支払えばラジオで発信することができた。

そしてインターネットが社会に浸透し始め、一般市民がウェブサイトやブログ、SNS で情報を発信できるようになった。こうして万人に情報発信の方法が開かれていった。

そこから振り返ると、1980年代後半から2000年前半に発行された『京都 T』は、インターネット以前の時代に、名も無い人々の声を拾い上げた雑誌と言える。これは、インターネット以前にしか作り上げることができなかった、市民の生の声を発信、そして記録した貴重な雑誌、まさに「市民による、市民のためのメディア」だったと位置づけることができる。

〔注釈〕

- 1) ミニコミ誌すなわちミニ・コミュニケーション誌は、大手新聞社や出版社が出版するマス・コミュニケーションの対に位置付けられる雑誌である。
- 2) 丸山尚『ミニコミ戦後史 ジャーナリズムの原点をもとめて』（三一書房、1985）。
- 3) 前掲2)、p.7。
- 4) 前掲2)、p.9。
- 5) 田村紀雄『タウン誌入門』（大和書房、1979）。
- 6) 高橋均「地域メディアとしての電話帳・タウン誌と広告」田村紀雄編『地域メディアを学ぶ人のために』（世界思想社、2003）。
- 7) 田村、前掲5)、p.9。
- 8) 岡村知子・安藤隆一「鳥取のタウン誌『スペース』をめぐる一考察：その思想的背景と書き手たち」『地域学論集：鳥取大学地域学部紀要』15（1）、2018。
- 9) 2018年6月24日に開催された日本マス・コミュニケーション学会2018年春季大会 ワークショップにて「明治・大正期の新聞紙の整理保存およびデジタルアーカイブの検討」として報告した。（問題提起者：樋口摩彌、討論者：金子貴昭、司会者：竹内幸絵）
- 10) 雑誌『京都 T』のデジタルアーカイブ化を目的とした研究は、2018～2019年の立命館大学アートリサーチセンターの共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」に採用され（研究代表者は小黒純、「ARC近代書籍ポータルデータベース」<https://www.dh-jac.net/db1/mbooks/results.php?f3=京都TOMORROW>（2019.11.1確認）で全ページ公開されている。
- 11) 牧野文夫は1980年代に京都市で勃発した古都税をめぐる騒動を調査し、『古都税往生』（出版社不明、1988）を著した。古都税とは正式名称を古都保存協力税といい、1980年代に寺社を拝観する観光客に対して、京都市が文化財を保護するために制定した法定外普通税であった。しかし京都の寺院をまとめる京都仏教会が反対し、ストライキをするなどの騒動になったものである。1988年には騒動は落ち着き、解決となった。
- 12) 高橋章三は京都市民であり、それ以上のことは不明。
- 13) 第1号（1988.10）p.1。
- 14) 同上。
- 15) 同上。
- 16) 第2号（1988.12）p.66。
- 17) 第2号（1988.12）p.67。
- 18) 第13号（1990.10-11）p.64。
- 19) 第13号（1990.10-11）pp.14-17。
- 20) 第13号（1990.10-11）pp.18-24。
- 21) 第13号（1990.10-11）pp.28-31。
- 22) 「議会報告 京都府議会『鴨川改修—ダム建設』」第10号（1990.4-5）pp.60-61など。
- 23) 田中の業績は、田中真澄『ダムと和尚—撤回させた

- 鴨川ダム』(北斗出版、1992)として出版された。
- 24) 第15号(1991.2) p.1。
 - 25) 第10号(1990.4-5) pp.58-59。
 - 26) 第14号(1990.12,1991.1) p.5。
 - 27) 第10号(1990.4-5) p.8。
 - 28) 第2-1号(1992.8) p.68。また第3-1号にも編集委員が「『ちょっと手伝って』と誘われ、一読者から転身!」したと語った。
 - 29) 第2-1号(1992.8) p.68。
 - 30) 第2-5号(1993.5)。
 - 31) 第2-12号(1994.8)。
 - 32) 第2-2号(1992.10-11)。
 - 33) 第2-9号(1994.1)。
 - 34) 第2-15号(1995.2) 近世期、京都は最も出版業が栄えた都市である。それについては蒔田稲城『京阪書籍商沿革史』(出版タイムス社、1928)が詳しい。
 - 35) 第2-11号(1994.6) p.35。
 - 36) 第2-15号(1995.2) p.58。第2-2号(1992.10-11) p.59、第2-8号(1993.11) pp.58-59。
 - 37) 第2-14号(1994.12) pp.160-162。
 - 38) 丸山尚『ミニコミ戦後史 ジャーナリズムの原点をもとめて』(三一書房、1985) p.152。
 - 39) 第2-16号(1995.5) p.66。「特集京の本屋さん・合評会報告」。
 - 40) この吉原邸は町家再生で注目されており、『京都 T』第2-15号(1995.2)のグラビア記事にもなっている。
 - 41) 第2-15号(1995.2) p.67。
 - 42) 第2-17号(1995.8)。
 - 43) 第2-17号(1995.8) p.66。
 - 44) 編集者は、読者からの希望・提案を募集している。しかし実際に読者からどのような要望があり、そのうちどれを採用しどれを不採用にしたかということの記述はない。
 - 45) 第3-3号、1998春。
 - 46) 第3-5号、1999。
 - 47) 第3-6号、2000。
 - 48) 第3-7号、2001夏。
 - 49) 第3-9号、2003春。
 - 50) 鴨川の四条大橋と三条大橋の間に、パリのボン・デ・ザール橋を模した橋の架橋計画で、1996年11月に市民に計画が公表された。予算も組まれたが、1997年5月以降に計画を推進する京都市に対して、大規模な反対活動が起こり、約1年後の1998年8月に京都市は計画を撤回した。
 - 51) 第3-1号(1997冬) p.1、pp.62-63。
 - 52) 第15号(1991.2) pp.42-43、第22号(1992.7) p.25。
 - 53) 「FM79.7MHz 京都三条ラジオカフェ」ホームページ。「京都三条ラジオカフェのコンセプト。http://radiocafe.jp (2019年12月29日確認)。

付録表 『京都 TOMORROW』特集記事一覧表

号数	発行年月	編集委員	住所	特集記事	特集記事の執筆者、登壇者など (編集委員は除く)
1号	1988.10	牧野文夫、高橋章三、折田泰宏、谷本さやか、中山和弘	〒606 京都市左京区田中大堰町109-15京都 TOMORROW 出版社内出版編集局	現在、京都で何が問題なのか	天野博、石田紀郎、小国英夫、坂田泰宏、坂田史郎、吹田恭子、秋本育生、高橋幸子、高橋章三、谷本さやか、中山和弘、長尾憲彰、深沢照代、富士谷あつ子、牧野文夫、松岡千津子
2号	1988.12	牧野文夫、高橋章三、折田泰宏、谷本さやか、中山和弘	〒606 京都市左京区田中大堰町109-15京都 TOMORROW 出版社内出版編集局	京の町並みを考える	中山和弘、植村裕(植村商店代表取締役)、山崎正史(京都大学建築学教室助手)、谷垣千秋(住生活研究所事務局長)
3号	1989.2	牧野文夫、高橋章三、折田泰宏、中山和弘	〒606 京都市左京区田中大堰町109-15京都 TOMORROW 出版社内出版編集局	老人問題を考える	山崎正史(京都大学建築学教室助手)、田中真澄(志明院住職)
4号	1989.4	牧野文夫、折田泰宏、松田普美子、中山和弘	〒606 京都市中京区寺町御池上ル トミタヤビル4F 京都 TOMORROW 出版社	京都を考える	清水武彦(元京都市経済局長)、永田孝(毎日新聞論説委員)、堀場雅夫(堀場製作所会長)、森毅(京都大学教授)、富士谷あつ子(評論家)、中村尚司(龍谷大学教授)
5号	1989.6	牧野文夫、折田泰宏、松田普美子、中山和弘	〒606 京都市中京区寺町御池上ル トミタヤビル4F 京都 TOMORROW 出版社	鴨川を考える	山崎正史(京都大学建築学教室助手)、田中真澄(志明院住職)
6号	1989.8	牧野文夫、折田泰宏、松田普美子、中山和弘	〒606 京都市中京区寺町御池上ル トミタヤビル4F 京都 TOMORROW 出版社	鴨川を考える(2) 留学生問題を考える	高井清二(舞鶴引上記念館館長)、仲尾宏(京都国際交流センター)、内海博司(京都「国際学生の家」ハウスファザー)、広瀬依子(ライター)、生田耕作(京都大学名誉教授)、秋本育生(グループ市民の眼)
7号	1989.10	牧野文夫、折田泰宏、松田普美子	〒606 京都市中京区寺町御池上ル トミタヤビル4F 京都 TOMORROW 出版社	京都の劇場とホール	茂山あきら(狂言師)、遠藤寿美子(アートスペース無門館プロデューサー)、宮下和夫(「ヤング・パレエ・フェスティバル」を企画)、山崎康孝(福井工業大学教授)
8号	1990.1	牧野文夫、折田泰宏、松田普美子	〒604 京都市中京区西洞院丸太町下ル田中町134-1 ライオンズマンション京都西洞院305号 京都 TOMORROW 出版社	市民運動の目指すもの	旭田劭(きょうと・市民のネットワーク代表)、小田実(作家)
9号	1990.3	牧野文夫、折田泰宏、松田普美子	〒604 京都市中京区西洞院丸太町下ル田中町134-1 ライオンズマンション京都西洞院305号 京都 TOMORROW 出版社	一条山の悲劇	寺本佐備子(一条山と岩倉の環境を守る会)、(編集部が大部分を執筆)
10号	1990.4-5	牧野文夫、折田泰宏、松田普美子	〒604 京都市中京区西洞院丸太町下ル田中町134-1 ライオンズマンション京都西洞院305号 京都 TOMORROW 出版社	新伏見学入門	堀堅二(伏見経済クラブ専務理事)、山本真嗣(郷土史家)、安達委男(小川法律事務所専務)、Aさん(匿名)、なかたにちえ、本間都
11号	1990.6-7	牧野文夫、折田泰宏	〒604 京都市中京区西洞院丸太町下ル田中町134-1 ライオンズマンション京都西洞院305号 鴨籠出版株式会社	鳥原太夫の乱 今、鳥原に何が起きているのか	前田鉄子(京都文教短期大学助教授)、(編集部が大部分を執筆)
12号	1990.8-9	牧野文夫、折田泰宏	〒604 京都市中京区西洞院丸太町下ル田中町134-1 ライオンズマンション京都西洞院305号 鴨籠出版株式会社	深泥池をどうするか	田端英雄(京都大学理学部助教授)、村田源(元京都大学理学部講師)、遠藤彰(立命館大学理工学部助教授、中村広明(弁護士)、笹岡英次(京都府文化財保護指導委員)、井上庄助(深泥池を美しくする会)
13号	1990.10-11	牧野文夫、折田泰宏	〒604 京都市中京区西洞院丸太町下ル田中町134-1 ライオンズマンション京都西洞院305号 鴨籠出版株式会社	第三次京都景観論争	中西秀彦(印刷会社役員)、西山卯三(京都大学名誉教授)、寺内隆(四条繁栄会商店街振興組理事長)、松本大圓(清水寺前貫主)、清水武彦(京都産業会館専務理事)、嶋哲久(JR 西日本地域開発本部開発推進チーム)、竹脇正秀(京都ホテル総務部次長)
14号	1990.12-1	牧野文夫、折田泰宏	〒604 京都市中京区西洞院丸太町下ル田中町134-1 ライオンズマンション京都西洞院305号 鴨籠出版株式会社	再び、京都景観論争	堀場雅夫(堀場製作所会長)、上田篤(京都精華大学教授)、片方信也(京都大学工学部)

15号	1991.2	牧野文夫、折田泰宏、保本公一、虫賀宗博	〒604 京都市中京区西洞院丸太町下ル田 院305号 鴨出版株式会社	京都景観論争の新段階	河野卓男(京都商工会議所地域開発委員会)、有馬頼底(大光明寺住職)、渡辺豊和(京都芸術短期大学教授)
16号	1991.4-5	牧野文夫、折田泰宏、保本公一、虫賀宗博	〒604 京都市中京区西洞院丸太町下ル田 院305号 ライオンズマンション京都西洞 院305号 鴨出版株式会社	美浜原発事故、人間にやさしいまち づくり	アイリーン・スミス、瀬戸口智子、上野勝代(京都府立大学助教授)、中村淳子(万寿寺通を守る会)、金在述(在日大韓基督教京都教会名誉長老)、京都環境問題交流会「0の会」
17号	1991.6-7	牧野文夫、折田泰宏、保本公一、虫賀宗博、 松田普美子	〒604 京都市左京区岩倉大鷲町45-2 鴨 出版株式会社	京都にやさしい現代建築とは	吉村篤一(建築環境研究所所長)、松本健(まつもと設計事務所)、若林広幸(若林広幸建築研究所所長)、谷口浩司(佛教大学社会学部助教授)
18号	1991.8-9	牧野文夫、折田泰宏、保本公一、虫賀宗博、 高橋幸子、松田普美子	〒604 京都市左京区岩倉大鷲町45-2 鴨 出版株式会社	ゴミ問題への視点	虫賀宗博(論業社代表)、郡篤孝(同志社大学経済学部教授)、依田彦三郎(東京大学工学部助手)、山田國廣(水循環科学研究所代表)、山本晃一(朝日新聞記者)、上島聖好(論業社 主婦)
19号	1991.10-11	折田泰宏、高橋幸子、牧野文夫、松田普美子、 虫賀宗博、保本公一	〒604 京都市左京区岩倉大鷲町45-2	消えていのか京都の近代建築	永田信一(京都市埋蔵文化財研究所調査課長)、萩本勝(平安高校教諭)、丸毛静雄(京都新聞記者 遺跡発掘担当)、和田晴吾(立命館大学文学部教授)
20号	1991.12	(京都 TOMORROW 編集委員会) 折田泰宏、 高橋幸子、牧野文夫、松田普美子、虫賀宗博、 保本公一	〒604 京都市左京区岩倉大鷲町45-2	京都の地下は大博物館	永田信一(京都市埋蔵文化財研究所調査課長)、萩本勝(平安高校教諭)、丸毛静雄(京都新聞記者 遺跡発掘担当)、和田晴吾(立命館大学文学部教授)
21号	1992.2	(京都 TOMORROW 編集委員会) 折田泰宏、 高橋幸子、牧野文夫、松田普美子、虫賀宗博、 保本公一	〒604 京都市左京区岩倉大鷲町45-2	揺れ動く京都景観問題、ウトロ	大谷幸夫(建築家 東京大学名誉教授)、田中喬(建築家 京都大学教授)、虫賀宗博(論業社代表)、徐勝(カリフォルニア大学研究員)
22号	1992.7	(京都 TOMORROW 編集委員会) 折田泰宏、 高橋幸子、牧野文夫、松田普美子、虫賀宗博、 保本公一	〒604 京都市左京区岩倉大鷲町45-2	京都の自然・再発見	塚本桂一(大阪薫英女子短期大学講師)、久山喜久雄(「法然院森の教室」代表世話人)、立澤史郎(京都大学院生)、虫賀宗博(論業社代表)、運幸唯(桃山南団地)、保本公一(「京都・水と緑をまもる連絡会」事務局長)
2-1号	1992.8-9	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、 牧野文夫、松田普美子	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	地域考・京に棲む	女性たちの視点を取り入れたいと努力した68
2-2号	1992.10-11	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、 牧野文夫、松田普美子	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	京の樹木に会う	加藤清(京都博愛会病院顧問)、倉本義久、一居時江、近藤正雄(造園師)、岩田政志(環境調査員)
2-3号	1993.1	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、 牧野文夫、松田普美子	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	京都の町内会	谷口浩司(佛教大学社会学部教授)、上田惟一(関西大学法学部教授)、国枝克一郎(自民党市会議員)、今枝徳蔵(民社党市会議員)、角替豊(公明党府会議員)、南野昭雄(共産党市会議員)、鈴木マサホ(社会党市会議員)、北沢恒彦(中小企業診断士)、浅利千代(伏見区納所)、高島茂夫(中立学区住民福祉協議会会長)、五十嵐守(伏見納所団地)、鷗地厚(インダストリアルデザイン)、木浦正雄(唐橋自治連合会長)、個人を抑えこむ町内会(中島さやか)、岸野亮淳(市原野自治連絡会)、吉田民生(岩倉南平岡町元自治会長)
2-4号	1993.3	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、 牧野文夫、松田普美子	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	これも京都“深夜”を探る	塚崎直樹(京都博愛会病院精神科医師)、原祥雄(元家裁調査官)、初井正夫(警備員)、森一人(タクシー運転手)、古市雅子(特別養護施設 寮母)
2-5号	1993.5	(編集委員) 一居時江、折田泰宏、高橋幸子、 塚崎美和子、牧野文夫、松田普美子	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	老人ケアのゆくえ 一死ぬまで京都でくらしたい	旭田助(京都精華大学教授)、岡田貴代子、横山康子、朝倉ゆりぞ、天野咲子、平田ひとえ(ホームヘルパー)、山本澄子(同志社大学講師)

2-6号	1993.7	(編集委員) 一居時江、折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、牧野文夫、松田晋美子	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	検証・パブリック現象を京都に見るーパブリックなんてクソくらえー	塩沢由典(大阪市立大学教授)、不動産業者4人(匿名)、西院満須(経済ジャーナリスト)
2-7号	1993.9	(編集委員) 一居時江、折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子(編集協力) 鴨川グループ	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	戦後期の京都 - 証言・体験を追う -	田中真人(同志社大学教授)、酒井寛太(愛知県半田市中島飛行場に学務員)、池田俊彦(同上)、高宮守(同上)、西村武美(同上)、小野惠美子(伊丹市三菱電気に学務員)、下村瑠璃子(同上)、今堀静江、山本時子、田中静枝、田畑忍(元同志社大学学長)、塩貝晋、上田まどこ、稲垣良代、吉田良子、塚崎直樹(京都博愛会病院精神科医師)
2-8号	1993.11	(編集委員) 一居時江、折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子(編集協力) 鴨川グループ	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	京の川・最新事情	片寄俊秀(長崎総合科学大学教授)、吉村伸一(横浜市下水道局河川設計課)、渡辺賢二(上桂川漁業協同組合事務局長)、折田康宏(編集委員、早くから水辺環境に注目)、塚本明正(鴨川グループメンバー)、関正和(建設省河川環境対策室長)、川那部浩哉(京都大学理学部教授)、風間随生(菅羽川を美しくする会・導入寺住職)、藤田初太郎(北白川伝統文化保存会・白川女風俗保存会長)、京都河川美化団体連合会
2-9号	1994.1	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子(編集協力) 京都景観会議	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	京のみち・路・道・通	恩地厚(株式会社GK京都社長)、材野博司(京都工芸繊維大学教授)、下坂守(京都国立博物館文部技官)、円満字洋介(住生活研究所所員)、谷口浩司(佛教大学教授)、材野博司(京都工芸繊維大学教授)、片山克己(染工房経営)、山内邦子、塚崎直樹(京都博愛会病院精神科医長)、今福義明(アケセス京都・代表)
2-10号	1994.3	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子(編集協力) 岡田 榮、井上茂、野口良介、那須耕介、原祥雄	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	京都・シネマバラダイス 映画に行こう!	鶴見俊輔、平田博志(映画監督)、井上茂(俳優)、岡田榮(映画ファン)、小野恵美子(女性監督を聞き書きした主婦)、上野隆三(殺陣師)、鳥居清(メイク)、岡野京子(エキストラ総務)、西田忠男(小道具)、穴戸大全(スタントマン)、下村千里(衣裳)、藤阿弘次郎(ライトマン)、山下耕一郎(全東映労連京都撮影所労働組合副委員長)、村主哲夫(全東映労連統一東映労組京都撮影所支部委員長)、立野留志子(フランクソフ主人)、弘原海晃(京一倉館元支配人)、神谷雅子(朝日シネマ支配人)、那須耕介、
2-11号	1994.6	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	なんどず? 建都1200年	奈良女子大学 小路田泰直(奈良女子大学)、原祥雄(元家裁調査官)、田中真人(同志社大学教授)、高田公理(武庫川女子大学教授)、渡辺豊和(京都造形芸術大学教授)財団法人平安遷都二〇〇年記念協会、
2-12号	1994.8	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子	京都市左京区吉田神楽岡町8 (楠本方)	死ぬまで京都でくらしたいー老人ケアの現在ー	高山敏、下川ともみ、寺田道男(京都「天皇制を問う」講座実行委員会)
2-13号	1994.1	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、山内邦子	京都市上京区葎屋町通上長者町上ル(吉原方)	占領期の京都	高橋幸子、和田円、木野村啓子、長田侃(福祉生協)、山添洋子(家族の会)、藤原明達(内科医)、ホルム麻植佳子(在宅ケアコンサルタント)
2-14号	1994.12	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、山内邦子	京都市上京区葎屋町通上長者町上ル(吉原方)	病む琵琶湖ー空からみた大湖水報告ー	高橋幸子、和田円、木野村啓子、長田侃(福祉生協)、山添洋子(家族の会)、藤原明達(内科医)、ホルム麻植佳子(在宅ケアコンサルタント)、松尾煥子(京都水問題を考える連絡会会員)、中島省三(映像作家)、清水義昭(「滋賀の自然と琵琶湖を守る会」事務局長)、永島鉄雄(草津市立新堂中学教諭)、鈴木紀雄(滋賀大学教授)、中田幸男(南浜漁業組合長)

2-15号	1995.2	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、山内邦子	京都市上京区葭屋町通上長者町上ル(吉原方)	京の本屋さん	中央藤一(三月書房)、平野篤(大垣書店営業部長兼本店店長)、来栖順(アバンティックセンター書籍マネージャー)、三木清樹(京都書房営業部)、林隆造(大宮書房)、落合祥義(出版社)、田村範明(読者)、木下明美(ジャーナリスト)、南浦邦仁(ジュンク堂書店京都店店長) 時松雅信(京都書肆監修)
2-16号	1995.5	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、山内邦子	京都市上京区葭屋町通上長者町上ル(吉原方)	阪神大震災と京都	京都博愛会病院 塚崎直樹、南部登志子、石田紀郎(京都大学農学部)、三間美宏(医師)、千田訓宗(元病院勤務)、材野博司(京都工芸繊維大学)、稲垣良代(若狭の原発を案じる京都府民の会)、
2-17号	1995.8	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、山内邦子	京都市上京区葭屋町通上長者町上ル(吉原方)	大学改革のウラオモテ	佐々木博代三(立命館大学社会学部教授)、郡篤孝(同志社大学経済学部教授)、谷口浩司(佛教大学社会学部教授)、柴田俊忍(京都大学教授)、竹内洋(京都大学教授)、杉村昌昭(龍谷大学教授)、中村尚司(龍谷大学教授)、泉藤太郎(フライズ技能士)、高田公理(武庫川女子大学教授)、藤本敏夫(事前王国)
2-18号	1995.12	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、山内邦子	京都市上京区葭屋町通上長者町上ル(吉原方)	京のお寺さん	井田みち、安井隆同(浄土宗上雲寺乗雲寺)、岸野亮淳(浄土宗西山派、恵光寺)、秋山教円(日蓮正宗 九条住本寺)、猿田充(真宗大谷派)、北沢恒彦、竹内純照(吉祥院副住職)、田中真澄(岩屋山金光峯寺志明院)、長尾憲彰(日蓮宗常寂光院)、梶田真章(浄土宗捨世派本山善気山獅谷法然院)、平塚豊堂(臨済宗相国寺派大本山相国寺塔頭養源院)、井上章子(真宗大谷派徳正寺坊守)、無礙光院坂口美幸、角替豊(府議会議員)
2-19号	1996.5	(編集委員) 折田泰宏、高橋幸子、塚崎美和子、山内邦子	京都市上京区葭屋町通上長者町上ル(吉原方)	京都発・地域と放送局	古川豊(朝日放送総務部調査次長)、関屋誠(アルファステーション FM 京都)、古住公義(民法労連 KBS 近畿放送労働組合書記長)、大阿啓介(NHK 京都放送局放送センター)、大西正彦(読売テレビ放送局放送情報センター京都支局カメラマン)、渡辺武達(同志社大学教授)、浅野健一(同志社大学教授)、神楽岡スズ、西田真弓(立命館大学産業社会学部鈴木みどりゼミ)
3-1号	1997冬	(編集委員) 折田泰宏、安見恵子、塚崎美和子、東浩美、藤波武、米林安子、吉原和恵、西田光子	京都市上京区葭屋町通上長者町上ル(吉原方)	今、町家が新しい	リムボン(立命館大学産業社会学部助教授)、杉本節子(奈良屋記念杉本家保存会)、黒竹節人(「百足屋」「くろちく」経営)、佐野充照(西陣活性化美観地をつくる会)、木下龍一(木下龍一)、谷口浩司(室町、新町を調査研究)
3-2号	1997秋	(編集委員) 折田泰宏、安見恵子、東浩美、藤波武、米林安子、吉原和恵、香山みゆき、横山慶一	京都市上京区葭屋町通上長者町上ル(吉原方)	京都の元氣な商店街	北沢恒彦(グループ・シユアー、精華大学非常勤講師)、高橋幸子、吉村篤一(建築家)、北白川・メルシー・マルギン、北野商店街、古川藤(新大宮商店街)、三木真也(錦市場)
3-3号	1998春	(編集委員) 折田泰宏、安見恵子、東浩美、藤波武、米林安子、吉原和恵、香山みゆき、横山慶一	京都市上京区葭屋町通上長者町上ル(吉原方)	どうなってる? 京都の政界	社会民主党京都府連合 副幹事長 新舛昌彦、日本共産党京都府委員会 委員長中井作太郎、新しい政治の力・京都 広報担当 小林哲也、自由民主党京都府支部連合会 前幹事長 国枝克一郎、山井和則、前原誠司、福山哲郎
3-4号	1998夏	(編集委員) 折田泰宏、安見恵子、東浩美、藤波武、米林安子、吉原和恵、香山みゆき、横山慶一	京都市上京区今出川通七本松西入ル真盛町731 北野洛邑館401	特集! 幻と消えた 京・ゴミ・今日	伊庭勉(京都大学助教授)、唯野弁太郎(弁護士)、堀孝弘(環境市民スタッフ)
3-5号	1999	(編集委員) 折田泰宏、安見恵子、東浩美、藤波武、米林安子、吉原和恵、香山みゆき、横山慶一	京都市上京区今出川通七本松西入ル真盛町731 北野洛邑館401	京都の不況	築地達郎(京都経済新聞社長)、唯野弁太郎(弁護士)

3-6号	2000	折田泰宏、安見恵子、阿月美枝	京都市上京区今出川通七本松西入ル真盛町 731 北野洛邑館401	金融再編成・京都版一市民からの提 言	築地達郎(京都経済新聞社長)、唯野弁太郎(弁護士)、牧野聡(弁護士)
3-7号	2001夏	折田泰宏、安見恵子	京都市上京区今出川通七本松西入ル真盛町 731 北野洛邑館401	ベンチャーの攻防 in 京都	滋野浩毅(「京都ものづくり塾」代表、立命館大学大学院政策科学研究科)、斎藤和久(デジタルアクト)、大橋弘明(アサンプ)、更田誠(ハイテクエンジニアブライズ)、森田作男(平安若葉座)、安田真(チャネルインサイト)、渡辺康一(百華書店)
3-8号	2002夏	折田泰宏、安見恵子	(有) ウェルコーヴ 京都市中京区烏丸通御池上ル満成ビル5階	京都の介護保険事情	齋藤弥生(大阪大学大学院人間科学研究科)、ホルム麻植佳子(ビジネスケアサービス代表)、長田祐士(社会福祉法人くらしのハーモニー理事長)、西村周三(京都大学経済学部教授)、「壬生老人ホーム」「ハーモニーこが」、「花の家」宮田さよ子、京都生協「くらしの助け合いの会」、家森幸男(WHO 循環器疾患予防国際共同研究センター長)
3-9号	2003春	折田泰宏、安見恵子、北野良子、平山舞	(有) ウェルコーヴ 京都市中京区烏丸通御池上ル満成ビル5階	映画へ行こう	富田美香(立命館大学)、竹内守(京都映画センター)、神谷雅子(朝日シネマ・元)、佐藤英明(RCS)、大西正彦(映像プロデューサー) 森脇清隆(京都文化博物館)、岩本英夫(MOVIX 副支配人)、山田善夫(祇園会館支配人)、寺坂智勝(大宮東映支配人)、藤波晃(文化芸術評論画家)、石橋義正(監督)
3-10号	2003秋	折田泰宏、安見恵子、北野良子、平山舞	(有) ウェルコーヴ 京都市中京区烏丸通御池上ル満成ビル5階	京都市長選一働き出した市民派	折田泰宏(京都市長を選ぶ市民の会共同代表)